

文学に現われたパラケルスス像

大橋 博 司

パラケルスス (Paracelsus, 1493—1541) はその数奇をきわめた生涯と深遠かつ難解な思想とのゆえに、多くの医学史家のみならず何人かの文学者の興味を惹いてきた。例えばゲーテのファウストや現代作家の中ではマルグリット・ユルスナールの小説「黒の過程」『L'Oeuvre au noir』(1968)にその投影を見ることができるといえる。しかしここではパラケルススが実名で登場するいくつかの作品をとりあげてみたい。

(1) 英国の詩人ロバート・ブラウニング (Robert Browning) の初期の習作に「パラケルスス」(1835)と題する長詩がある。五部から成るこの詩劇は劇であるよりは詩であり、その主題は知と愛との相剋にある。知の万能を過信して自然の探求にその生涯を燃焼させたパラケルススが、死の床にあって、はじめて愛の貴さを知るといふ、きわめて

難解な形而上学詩がブラウニングが描くところのパラケルスス像であり、むしろ若き日のブラウニング自身の告白であらうか。

(2) オーストリアの文学者アルトゥール・シュニッツァー (Arthur Schnitzler) にも一幕劇「パラケルスス」がある。これは一八九八年に発表され一八九九年ブルク劇場において初演された。場面は一六世紀初頭のバーゼルであり、主人公パラケルススは偉大な催眠術者として登場する。貞淑な人妻の無意識の願望を催眠術によって浮び上らせた主人公は以下のように述べる。

「夢と眼覚め、真実と虚偽とは互に流動する。……確かなことなどどこにもない。……それを知っている者こそ賢者なのだ。」

ちなみにシュニッツァーは作家となる前に、ウィーン大学精神科においてマイネルト教授のもとで精神医学を学び、とくに催眠術に関する論文も書いている。彼が精神医学修業時代に学んだ催眠術からの体験は、かかる現実と夢想との、真実と虚偽との相対性、交代性であり、これこそがシュニッツァーの「世界観」であったといえよう。

(3) 二〇世紀のドイツ人作家コルベンハイヤー (E.G. Kolbenheyer) の「パラケルスス三部作」『Paracelsus. Roman-Trilogie』(1918—1926) はドイツのみならず諸国の知識人に

パラケルススの名を広めた。この大作はその文体——会話はすべてマルター、パラケルスス時代のドイツ語が用いられている——や歴史的細部にいたるまで、まさしく歴史小説にふさわしいが、ゼップ・ドーマンドル (Sepp Domandl) の批判によると、残念ながらパラケルスス思想の哲学的理解の点で、著しい欠陥を残している。またコルベンハイヤーのその後のナチズムへ接近が、一時的にもせよパラケルスス像の歪曲を招来したとすれば、これまた残念といわざるをえない。

(4) 一九七一年、九十歳で死亡したオーストリアの詩人、劇作家マックス・メル (Max Mell) はその生涯をかけて練り上げた珠玉の作品、「パラケルススの庭——演劇的幻想」『Der Garten des Paracelsus. Dramatische Phantasie』(1974) を残している。多くの象徴と隠喩を散りばめた幻想劇で、ブルク劇場の劇作家であると共にパラケルススの研究者でもあったメルのテキストには、随所にパラケルスス

自身の言葉が配されている。場所はザルツブルク、年代は一五四一年、彼の没年の出来事である。

(5) 東独の現代作家ローゼマリー・シュエダー (Rosemarie Schuder) にもパラケルススを主人公とした小説がある。「パラケルスと悦楽の園」『Paracelsus und der Garten der Luste』(5. Aufl. 1976) で、彼女にはパラケルススの同時代者であるアグリッパ・フォン・ネットスハイム (Agrippa von Nettesheim) をあつかった小説や、「悦楽の園」その他の作品で有名な画家ヒエロニムス・ボッスの研究書もある。彼女の「パラケルスス」は一応歴史小説の形をとり、一五二六年バーゼルのフローベン——当時の人文主義者たちのパトロンであり、かつ彼等の著作の出版主でもあった——のもとに姿を現わしたパラケルススを中心に、物語が展開する。

以上の諸作品の芸術的評価については文芸批評家にゆづらざるをえないが、医家パラケルススへの関心が多くの秀れた作家の眼を通じて、さまざまに表現されていることは興味深い。以上に各作品の典故を挙げておく。

(1) Robert Browning: Poems and Plays. Introduced by J.

- Bryson. Vol. 1: 1833-1844. Everymann's Library, London 1964.
- (2) Arthur Schnitzler: Das dramatische Werk. Bd. 2, Fischer, Frankfurt am Main, 1978.
- (3) E. G. Kolbenheyer: Paracelsus. Roman-Trilogie. Lehmann, München, 1964.
- (4) Max Mell: Der Garten des Paracelsus. Dramatische Phantasia. Styria, Graz/Wien/Köln, 1974.
- (5) Rosemarie Schuder: Paracelsus und der Garten der Lüste. Roman. Rütten u. Loening, Berlin, 5. Aufl., 1976.

(京都大学解剖)

ヘルマン・ブールハーフェの
座右の銘「単純は真理のし
るしなり」の語源について

守屋 正

ヘルマン・ブールハーフェ(一六六八一—一七三八)の有名な座右の銘「単純は真理のしるしなり」“SIMPLEX VERI SIGILLUM”の語源は、彼がギリシヤ語に極めて堪能であったため、ギリシヤの悲劇作家エウリピデース(紀元前五世紀)の悲劇『フェニキアの女たち』の四六九行目のせりふ $\alpha\pi\lambda\omicron\upsilon\varsigma$ o $\mu\iota\theta\omicron\varsigma$ $\tau\eta\varsigma$ $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha\varsigma$ $\epsilon\sigma\tau\iota$, 「真理の言葉は単純である」をラテン語に翻訳したものである。英訳すれば The word of the truth is simple となる。

ブールハーフェはラテン訳する時 verbum 「言葉」とせず sigillum 「小さなしるし」と表現したのは simplex という形容詞の語義にもうまく照応し、謙虚なラテン語訳を思う。

(京都市開業)